

【本文】

今昔、比叡山の西塔に実因僧都と云ふ人ありけり。小松の僧都とぞ云ひける。顕蜜の道に付きて止む事無かりける人なり。

それに、いみじく力ある人にてありける。

(略)

天皇の、僧都内御修法行ひける時、御加持に参りたりけるに、伴僧どもは皆通りにけり。僧都は暫く候ひて夜うちふくる程に罷り出でけるに、「①(従僧童子などはあらむ)」と思ひけるに、履物ばかりを置きて、従僧童子も見へざりければ、ただ独り衛門陳より歩み出けるに、月の極めて明かなれば、武徳殿の方様に歩み行きけるに、軽かに装ぞきたる男一人寄り来て、僧都に指向ひて云はく、「何ぞ独りはおはしますぞ。負はれさせ給へ。己れ負ひて将奉らん」と云ひければ、僧都、「いとよかりなん」と云ひて、②(心安く)負はれにければ、男搔負ひて西の大宮二条の辻に走り出て、「ここに下り給へ」と云へば、僧都、「我はここへ【3】来むと思ひつる。壇所に行かむと思ひつる」と云ひければ、

男さばかり力ある人とも知らで、「ただある僧の衣厚く着たるなり」と思ひて、③(「衣を剥む」と思ひければ)、あららかに打ち振ひて、音をいからかして、「④(いかでか下りずしては云ふぞ)。和御房は命惜くは無きか。その着たる衣得させよ」と云ひて、立ち返らむとするに、僧都、「否や。かくは思はざりつ。『我が独り行くを見ていと惜がりて負ひて行かんとするなめり』とこそ思ひつれ。寒きに、⑤(衣をこそえ脱ぐまじけれ)」と云ひて、男の腰をひしと交みたりければ、大刀などを以て腰を交み切らむ如く、男堪へ難く思へければ、「極めて悪く思ひ候ひけり。錯ち申さむと思ひ給へるが愚に候ひけるなり。さらばおはしますべからむ所に将奉らむ。腰を少し緩べさせ給へ。目抜け、腰切れ候ひぬべし」と⑥(術無気なる音)を出して云ひければ、僧都、「かくこそ云はめ」とて、腰を緩べて軽く成して負はれたりければ、男負ひ上げて、「何ちおはしますさむずる」と問へば、僧都、「『宴の松原に行きて月見む』と思ひつるを、汝がさかしくてここへ負ひて将来れば、先づそこに将行きて月見せよ」と云ひければ、男本の如くに、宴の松原に将行きにけり。

(「今昔物語集」による。ただし本文の一部を省略した)

注釈

※西の大宮二条の辻……西大宮大路と二条大路の交差点

※壇所……修法の壇を築いてある所

【問題】

問一 傍線部①の現代語訳として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 お供の僧や童子は待たなくてよい
- 2 お供の僧や童子が待っているだろう
- 3 どうしてお供の僧や童子は待っていないのか
- 4 お供の僧や童子は待っているだろうか

問二 傍線部②の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 不安げに
- 2 気晴らしに
- 3 雑に
- 4 気軽に

問三 空欄〔3〕に入るものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 も
- 2 こそ
- 3 ば
- 4 や

問四 傍線部③の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 行先を迷っている僧が油断しているように見えたから
- 2 着物を重ね着しているただの僧だと思ったから
- 3 僧が身に着けているのが豪華な着物だったから
- 4 行先についてわがママを言う僧に怒りを覚えたから

問五 傍線部④の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 降りたくないとはどういうことだ
- 2 どこで降りたいと言うのだ
- 3 どのようにして降りたいのだ
- 4 降りたくないと言ったのだな

問六 傍線部⑤の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 着物を脱いだらよかったのに
- 2 着物を脱いでみようかしら
- 3 着物を脱がない方がいいらしい
- 4 着物を脱ぐわけにはいかない

問七 傍線部⑥の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 気味が悪い声
- 2 そっけない声
- 3 どうしようもなさそうな声
- 4 意地が悪そうな声

問八 本文と同じジャンルのものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 日本霊異記
- 2 無名草子
- 3 方丈記
- 4 保元物語

【解説】

問一:2

問二:4

問三:4

問四:2

問五:1

問六:4

問七:3

問八:1

【問一:文法の識別(助動詞「む」)】

【解答】2

【解説】

傍線部の「あらむ」は、動詞「あり」の未然形に助動詞「む」がついた形だ。

「む」の訳し分け(推量・意志・勧誘・假定・婉曲)は中堅私大の必須知識だが、見極め方はいたってシンプルだ。

直後に「と思ひけるに(～と思ったところ)」という心内文が続いている場合、この「む」は「推量(～だろう)」または「意志(～よう)」と訳するのがセオリーだ。

ここでは主語がお供の者(三人称)なので、「(お供が外に)いるだろう」という「推量」が最適となる。

【ポイント】

「～むと思ふ」の形が出てきたら、主語を確認せよ。

・主語が自分なら「～しよう(意志)」

・主語が他人なら「～だろう(推量)」

【問二:単語の意味(重要古語「心安し」)】

【解答】4

【解説】

古文単語「心安し(こころやすし)」は、現代語の「安心だ」という意味だけでなく、もっと踏み込んだ意味を持つ。

特に入試で問われるのは「遠慮がいない」「気兼ねしない」「気楽だ」というニュアンスだ。

本文では、見知らぬ男から「おんぶしましょう」と言われた僧都が、疑うことも遠慮することもなく「いとよかりなん(それは名案だ)」と即答して背中に乗った場面だ。この状況に合致するのは「気楽に／遠慮なく」という意味の「4」となる。

【ポイント】

「心安し」は「安心」よりも「ハードルが低い(気楽だ)」というイメージで捉えておくと、読解のズレがなくなる。

【問三：空欄補充(係助詞の機能)】

【解答】4

【解説】

空欄を含む一文「ここへ[3]来むと思ひつる」の文脈を考える。

男は僧都を勝手に二条の辻へ連れて行き「ここで降りろ」と言った。それに対し、僧都は「私は壇所(修行の場所)に行くつもりだったのだ(＝ここに来るつもりはなかった)」と反論している。

選択肢4の「や」を入れると、「ここへや来むと思ひつる」となり、「ここに来ようと思っただろうか、いや思っていない」という「反語」の表現になる。

自分の意図に反した場所に連れてこられた不満を述べる文脈として、この反語表現が最も適切だ。

【ポイント】

中堅私大の空欄補充では、文脈に「反論」や「強い否定」のニュアンスが必要な場合、係助詞(特に「や」「か」による反語)が正解になる確率が非常に高い。

【問四：内容読解(理由の特定)】

【解答】2

【解説】

「衣を剥ぎ取ろう」と男が思った理由を探す問題だ。

古文の理由問題は、傍線部の「直前」に答えが書いてあることが圧倒的に多い。

傍線③の直前を見ると、「ただある僧の衣厚く着たるなりと思ひて」とある。「ただの僧が衣を何枚も重ね着しているだけだ」と男が判断したことが直接の理由だ。

「厚着をしている＝良い衣をたくさん持っている＝格好の獲物だ」という強盗の心理を読み取れば、選択肢2が正解だと導き出せる。

【問五：解釈（疑問・反語の「いかでか」）】

【解答】1

【解説】

「いかでか」は、後に続く言葉や文脈によって「どうして～か（疑問・反語）」あるいは「なんとかして～したい（願望）」と訳し分ける超重要単語だ。

ここでは、強盗が「衣をよこせ」と脅している場面であり、なかなか下りようとししない僧に対して「いかでか（どうして）下りずしては（下りないで）云ふぞ（言うのか）」とすごんでいる。

したがって、「降りないとはどういうことだ」と詰め寄る「1」が正解となる。

【ポイント】

文末が「ぞ」で結ばれている（係り結び）場合は、疑問か反語のどちらかだ。強盗が怒っている文脈から判断すれば迷うことはない。

【問六：文法（不可能の表現「え～打消」）】

【解答】4

【解説】

この「え～まじ」は、中堅私大で最も狙われる文法事項の一つだ。

副詞「え」が、下に打消の言葉（ず、まじ、で、など）を伴うと、「～できない」という不可能な意味を表す。

・「え」：～できない

・「まじ」：打消の意志（～まい）・打消の推量（～ないだろう）

僧都は「寒いから、衣を脱ぐことはできない（脱ぐわけにはいかない）」と男の要求を拒絶している。この「不可能」のニュアンスを含んでいるのは「4」だけだ。

【ポイント】

「え……（打消）」を見つけたら、即座に「できない」と訳せ。これだけで解ける問題が私大入試には驚くほど多い。

【問七: 単語の意味(「術無し」)】

【解答】3

【解説】

「術(ず)無し」は、漢字で書けば「術無し」であり、文字通り「手段がない」「どうしようもない」という意味だ。

文脈を確認すると、怪力の僧都に腰を強く締め上げられ、男が「目抜け、腰切れ候ひぬべし(目玉が飛び出し、腰が切れてしまいそうです)」と悲鳴を上げている場面だ。

もはや逃げることも抵抗することもできず、泣き言を言っている状態なので、「どうしようもなさそうな声」とする「3」が最適だ。

【ポイント】

「術無し」=「どうしようもない」はセットで覚えよ。現代語の「すべがない」の語源だと知っておけば忘れないだろう。

【問八: 文学史(ジャンルの識別)】

【解答】1

【解説】

本文の「今昔物語集」は、平安末期に成立した日本最大の「説話(せつわ)集」だ。

同じジャンルのものを選ばせる問題なので、選択肢を整理する。

1. 日本霊異記: 平安初期の日本最古の「説話集」。(正解)
2. 無名草子: 鎌倉時代の「物語評論」。
3. 方丈記: 鎌倉時代の「随筆」。
4. 保元物語: 鎌倉時代の「軍記物語」。

「説話」という共通項を持つ「1」が正解となる。

【全文現代語訳】

今となっては昔のことだが、比叡山の西塔に実因僧都(じついんそうず)という人がいた。「小松の僧都」と呼ばれていた。顕教・密教の修行において、並ぶ者がいないほど優れた人であった。

また、僧都は非常に力持ちの人でもあった。(中略)

天皇のために僧都が宮中で御修法(みしゅほう)を行った際、御加持(お祈り)のために参上したのだが、お供の僧たちは皆(先に)帰ってしまった。僧都はしばらく控えていて、夜が更ける頃に退出した。「(外には)お供の僧や童子などが待っているだろう」と思っていたのだが、履物だけが置いてあって、お供の者の姿が見えなかったので、たった一人で衛門陣から歩き出した。月が格別に明るかったので、武徳殿の方へと歩いて行くと、軽装をした男が一人寄って来て、僧都に向き合って言うことには、「どうして独りでいらっしゃるのですか。おんぶされなさい。私が背負ってお連れしましょう」と言ったので、僧都は「それは非常にありがたい」と言って、遠慮なく背負われた。

男は(僧都を)担ぎ上げて、西の大宮二条の交差点に走り出て、「ここで下りてください」と言うと、僧都は「私はここへ(来るつもりがあったらどうか、いやない)。壇所(修行の場所)に行こうと思っていたのだ」と言った。

男は(僧都が)それほど力持ちの人だとも知らないで、「ただの僧が衣を厚着しているだけだ」と思って、「衣を剥ぎ取ろう」と考えたので、荒々しく(僧都を)振り動かして、声を荒らげて、「どうして下りないでそんなことを言うのか。貴僧は命が惜しくないのか。その着ている衣をよこせ」と言って、引き返そうとしたところ、僧都は「いや、とんでもない。そんなこと(強盗だとは)思わなかったぞ。『私が独りで歩くのを見て、気の毒に思って背負って行こうとしているのだろう』と思っていたのだ。この寒いのに、衣を脱ぐわけにはいかない」と言って、男の腰を(両足で)ひしとしがみついた(締め付けた)ところ、太刀などで腰を締め切るかのようであった。

男は耐え難く思われたので、「とんでもなく悪いことを考えてしまいました。間違い(過ち)を犯そうと思ったのは愚かなことでした。それならば、おっしゃる場所へお連れしましょう。腰の締め付けを少し緩めてください。関節が外れ、腰が切れてしまいそうです」と、どうしようもなさそうな声を出して言ったので、僧都は「そう言うべきだ」と言って、腰を緩めて(体を)軽くして背負われた。「どちらへいらっしゃいますか」と問うと、僧都は「『宴(えん)の松原に行って月を見よう』と思っていたのだが、お前が気が利いてここまで背負ってきたのだから、まずはそこへ連れて行って月を見せろ」と言ったので、男は(観念して)元通りに背負って、宴の松原へ連れて行ったのである。